城のある都市復活

福岡城だより

2020.冬
WINTER
No.64

迎春

福岡城・城下町フォトコンテスト特別賞　「鮮やかなメッセージ」　小山　望月様

福岡城市民の会 十五周年を迎えて

NPO法人福岡城市民の会 理事長
石井　幸孝

新年おめでとうございます。福岡城市民の会は、本年2月でNPO設立満15年を数えます。これまでお支えいただいた会員の皆さん始め、多くの関係機関、関係者の皆さんに感謝申しあげます。この期間、世の中は大きく変貌を遂げてきましたが、当会の活動も常に「伝統」と「進化」をモットーに努力してまいりました。

福岡城と鴻臚館という、貴重な遺跡の在りし日の姿を目で見える形で、天守閣のような建物を復元したいという思いは万人共通ですが、膨大な資金と時間が必要で、なかなか進みません。

一方、日本で最も古い歴史と豊かな文化のある、ここ福岡の地で仕事や各種の活動をする方々が、その郷土の歴史や文化を心得た上で、取り組めば、もっと豊かなこの地ならではの成果を上げることができるのに、意外と関心が薄いと感じ、「博多どんたく港まつり」の福岡城内伝統行事、「福岡歴史観光市民大学」始め、「文化人・経済人交流会」や多彩なガイダンス事業なども手掛けてまいりました。お陰様で大勢の多彩な方々が参加されるようになってきました。今後、広く市民層や経済界などにも関心が高まってくると、何かシンボルを復元してランドマークにしようという気運も大きくなってくるはずです。

福岡はアジアの拠点都市として、全国的には人口減少時代の今も成長しています。今後は古い歴史・豊かな文化を持つ強みを生かしていくことがますます大切になっていきます。当会もそんな意識を持った貴重な存在をめざして、今後とも「伝統」と「進化」をモットーに、より幅広く活動していく所存です。かわらぬご鞭撻、ご支援をお願いいたします。

シリーズ 在りし日の福岡城・鴻臚館への誘い－5

福岡城市民の会会員　室川 康男（画・文）

「鴻臚館北館・交易（唐物と鴻臚館の終焉・中世博多商人の萌芽）」

博多湾に入って、穏やかな荒津には何隻もの唐船が停泊しています。そして浜との間を慌ただしく行き来する小舟。浜では次々と木箱などを陸揚げしています。かたや沈香（じんこう）の馥郁な香り漂う鴻臚館北館の中庭には、次々と大量の交易品が運び込まれ、今や「唐物使（からもののつかい）」が中国の交易商人と商談の真っ最中です。唐物使は朝廷から託された「買い付けリスト」に基づいて、お目当ての品々を片っ端から買い上げています。

飛鳥時代からの外交の場「筑紫館（つくしのむろつみ）」は平安時代（838年頃）には中国風に「鴻臚館」と改称され、新羅、唐の使節団や交易商人が頻繁にやってきました。おかげで、「シルクロードの東の終着点」には大陸から多くの文物が伝来し、カルチャーショックをもたらしました。

寛平6年（894）、菅原道眞の建議によって遣唐使が廃止されると、鴻臚館は「外交施設」から「交易の舞台」へと、その役割を変えていきました。

その頃から国内では「国風文化」が成熟していきます。「王朝文化」が花開き、唐貴族のように荘厳化していくなか、王朝生活の必需品として、舶来品が重宝されるようになり、「和漢融合文化」が生まれました。それら舶来品を「唐物（からもの）」として、平安貴族、富裕層はこぞってステータス・シンボルとして求め、海外ブランド品は交易の主役となりました。当時の貴族の代表的風俗として、「源氏物語絵巻」に描かれた「光源氏が愛した唐物たち」は、平安貴族のモダンな宮廷生活を彷彿とさせてくれます。

「唐物」の主なものは、沈香などの香料、薫物（たきもの）・西域イスラムや中国のガラス製品・唐紙・秘色青磁や唐三彩などの陶器・唐錦や綾の布・虎や豹の毛皮・筆墨の文具・絵画・顔料・調度品・薬・茶・楽器・書籍・唐猫、孔雀やオウムなどの珍獣です。ちなみに、輸出品は砂金・水銀・真珠・真綿・生糸．硫黄などでした。

交易の唐船が到着すると、鴻臚館から大宰府政庁に連絡があり、政庁は朝廷（平安京）に急便を送り報告します。許可されると交易商人は上陸して鴻臚館に入館することができます。一方朝廷の「蔵人所」は「唐物使」を任命派遣します。彼らは貴族や富裕層が求める品々を優先して買い占めて、残りを地元貴族が買う、いわゆる「官貿易」を行いました。

しかしこのシステムでは、大宰府から平安京まで連絡し許可を得るのに、陸路で14日、海路で30日もかかります。商人にとって、長い場合など6ヶ月もの間、鴻臚館内にて外出を禁止されて待たされることになり、効率の悪い交易でした。

平安時代末期、延喜9年（909）からは、朝廷は経費節約のため唐物使を派遣せず、買い上げを大宰府に委ねるようになりました。平将門の乱や藤原純友の乱などで、弱体化した朝廷の力が地方にまで及ばなくなると、高官達は「買い付けリスト」以外の珍品を入手できる機会が増え、権力者に極上の唐物を献上したりしました。中には、大宰府長官の大江匡房（まさふさ）などは任期を終えた時、莫大な財産を船2隻に仕立てて京に戻っていったようです。いつの世にもよくある権力者との癒着の蔓延は官貿易システムの衰退を招き、それに追い討ちをかけるように永承2年（1047）「宋商人宿坊（鴻臚館のこと）」を焼失させた放火犯4人捕縛の記録以降は、200年続いた「鴻臚館」は文献から姿を消し終焉を迎えました。

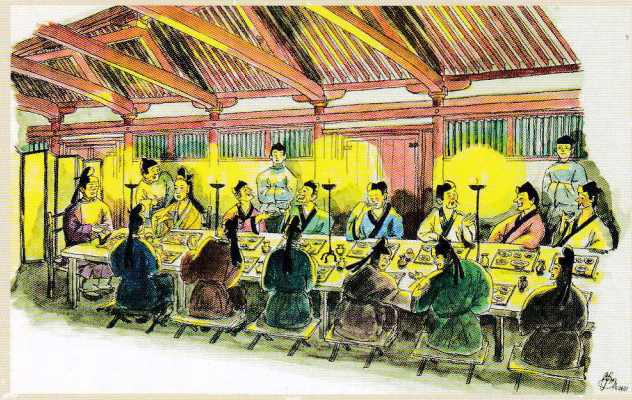
前後して中国商人は帰化して博多浜に居住するようになり、1000年代の中頃には交易の中心は東の博多部の「博多津唐房（帰化人の街）」に移っていきました。いよいよ交易の表舞台として商業都市博多が勃興し、「博多商人」が活躍します。

なお画には交易品の中に奈良時代、平安時代の交易品や遣隋使、遣唐使が持ち帰った舶来品なども混在させています。時代が交錯していますが、華やかなりし鴻臚館での交易場面のイメージを膨らませていただければと思います。

「鴻臚館北館・酒宴」

賑やかに日本語、朝鮮語が飛び交い、灯台の明かりの中、宴たけなわ。今宵も大宰府の役人達が新羅からの使節団を酒宴でおもてなしです。

使節団は朝廷から入国の許可が出るまで、外出禁止の中３～６ヶ月の長期滞在を余儀なくされます。その間、鴻臚館では外国からの蕃客（ばんかく、新羅・唐の使節団や交易商人たち）を、頻繁に酒宴でもてなしていました。ただしその滞在費は全て大宰府持ちで、商客をただで泊めて、ただで食事、酒宴を供しました。「続日本後紀」や「日本三代実録」などには、「大宰府に勅して、蕃客を鴻臚館に安置し、前例に随って供給させる」という記述が随所に見られます。今も昔も外交の世界は変わらないものです・・・ね。



シリーズ

明治に活躍した福岡藩の先人たち

第四回 「安川 敬一郎」

福岡城市民の会ガイド　中村 靖

筑豊の御三家と呼ばれる安川家、安川敬一郎は黒田藩30石の藩士、儒学者徳永省易の四男として嘉永2年（1849年）福岡鳥飼村に生まれました。16歳で安川岡右衛門に婿入りして、四女の峰と18歳で結婚しています。幼い頃から漢学を学び、いつも青表紙の漢籍の本を抱えていたため〝青表紙〟とからかわれていたようです。

学問好きだった敬一郎は藩命により明治2年（1869年）京都へ、翌3年には徳川家が移っていた静岡に留学し、勝海舟や山岡鉄舟を訪ねて教えを受けています。この時、勝海舟に〝これからはお前さん英語だよ〟と洋学を勧められています。上京して慶應義塾に入学しますがその後、二人の兄が相次いで不慮の死を遂げたため、明治7年（1874年）学業を断念。帰郷して炭坑業を受け継ぎました。25歳のときでした。

その後、若松築港、明治炭鉱、明治紡績（戸畑）などの創立に相次いで関与し、明治41年（1908年）には安川グループの本拠となる明治鉱業を設立しました。

敬一郎は、〝財産は私すべきものではなく、天下国家のために使うべき〟という考えを、生涯を通じて貫きました。炭鉱業が好況の中、安川電機、九州製鋼、黒崎窯業と事業を拡大すると共に、筑豊御三家の貝島、麻生の協力のもと、〝八幡に製鐵所を〟と国や民間の有力者を説得し、招致することにも貢献しています。この時、金子堅太郎が農商務省次官であり、製鐵所設立委員長であったことも幸いしたようです。

また明治42年（1909年）には私立明治専門学校（現九州工業大学）を戸畑に開学しています。この時息子の、松本健次郎、安川清三郎と共に用地探しをし、後に九州大が創設される、箱崎の地も候補地だったそうです。日露戦争時の軍需景気による利益を〝社会に返したい、国の将来に役立つ人材を作りたい〟との当時の思いが、今なお多くの技術者を育てています。

この時の総長が山川健次郎（会津藩士〈白虎隊〉、元東大総長、のちの九州大初代総長）です。大学の庭には「錬心壮胆」の石碑があり、敬一郎の書を刻んだこの石碑は〝将来、社会公共に尽くす有為の人材たれ〟と、今なお敬一郎の「技術と共に人づくり」の建学の志を訴えかけ、明治の不屈の精神を伝えています。

そして敬一郎の精神は松本健次郎、安川清三郎、安川第五郎、安川寛ら一族へと引き継がれていきました。

大正7年（1918年）70歳で引退し、昭和9年（1934年）死去。85歳でした。

遺稿には、没後、手記と日記をまとめた「撫松余韻」、「安川敬一郎日記」などがあります。

安川家墓所がある唐人町の善龍寺

安川敬一郎 年譜

一八四九（嘉永2）年	福岡藩士徳永省易の四男として福岡鳥飼村に生まれる。
一八六四（元治元）年	安川家の養子となる。
一八六六（慶応2）年	家督を相続して敬一郎と改名。
一八七四（明治7）年	兄の死去に伴い東京遊学から帰郷、炭鉱経営に従事。
一九〇八（明治41）年	明治鉱業株式会社を創立（社長）
一九〇九（明治42）年	明治専門学校（現九州工業大学前身）を設立。
一九一四（大正3）年	補欠選挙で衆議院議員となる。翌年の総選挙では落選。
一九一七（大正6）年	九州製鋼株式会社を創設（のち八幡製鉄所が買収）
一九一八（大正7）年	明治鉱業社長を実子の松本健次郎に譲って引退
一九二〇（大正9）年	男爵に叙せられる。
一九二四（大正13）年	貴族院委員となる。
一九三四（昭和9）年	11月30日に85歳で没

ガイドツアー 参加者募集

福岡城「東西南北」城下町巡り

西コース 2月2日(日) 10時～12時

大濠郵便局前→腰巻き石垣と潮見櫓跡→杉土手と松土手→平野神社→鳥飼八幡宮→金龍寺→浄満寺 解散

南コース 2月9日(日) 10時～12時

三の丸スクエア→広田弘毅像→菊池霊社→駿河谷天満宮→野村望東尼生誕地→加藤司書下屋敷跡碑→筑紫女学園 解散

北コース 2月23日(日) 10時～12時

三の丸スクエア→圓應寺→小春姫大明神→貝原益軒屋敷跡→光雲神社→平野國臣像 解散

参加費＝一名に付き500円（小学生以下無料）
申込み・お問合せ＝福岡城市民の会（裏面参照）
実施は5～40名　実施3日前（木曜日）締切り

花クラブ通信

「福岡城で森林浴！」

第一回「福岡城花クラブ」に参加しました。城内の大木を、地図を見ながら皆で探し、発見した大木の姿の素晴らしさに感動しました。

「いつもと違う視点で歩けた」「福岡城内が、こんなに木々が豊かとは知らなかった！」「思わず何度も深呼吸したよ」など皆でワイワイおしゃべりをしながら散策しました。こんな身近な場所で森林浴が出来るなんて最高でした。これから多くの友達に「福岡城で森林浴！」を広めたいです。次回を楽しみにしています。

初めての企画でしたが、予想以上のご好評を頂きました。次回は、さらに楽しい内容を計画しております。会員になられて、ご一緒に参加しませんか。

第二回・桜のお花見と森林浴

日　時・・・4月5日（日）11時～13時30分
集合場所・・・三の丸スクエア入口
参加費・・・千円（お弁当とお茶をご用意します）

報告 第12期 福岡歴史観光市民大学（第11回から第20回）

第12期福岡歴史観光市民大学は、7月1日に開講、11月18日までに全講義20回が終了し、最終日閉講式が行われました。

閉講式では、石井幸孝学長（当会理事長）が、この歴史的に恵まれた地域で歴史を学ぶことの大切さと、当講座の聴講により熱心に向学されている受講者の皆様への敬意と感謝を述べました。事務局からは「出席率70％以上の精勤者が99名（うち皆勤24名）平均すると登録者の約74％の出席率であった」と報告がありました。皆勤の受講者の中から、坂田隆一様に代表で修了証が授与され、本田郁美様からは受講の動機と、印象に残った講義の感想を話していただきました。

今号では第11回から第20回までの講師、講義のテーマと内容を簡単に紹介します。（敬称略）

第11回　竹間　宗麿
高良山の歴史と信仰について
筑後一の宮であり、重要文化財や県・市指定文化財を複数保有する高良大社の竹間宮司は、歴史にも篤く、大社を語る端々に、歴史的な関連性がちりばめられ、奥深い話をうかがうことができました。

第12回　吉村　靖徳
福岡における装飾古墳の世界
装飾古墳を実際に見たことがあるかどうかの問いかけに、見たことがあると答えた方の比率が高く、改めて、受講者の歴史に対する関心や知識の高さを知る機会ともなりました。

第13回　松隈　紀生　福岡（博多）の行事食
月を追って行事につきものの食べ物を紹介していただきました。博多独特のお料理については、名前の由来、材料など詳しい解説がありました。実際先生が作られたお料理の写真には、日頃お料理に関心のない男性もひきつけられたのではないでしょうか。

第14回　石瀧　豊美
明治期東京で活躍した福岡人
明治時代の雑誌の愉快な人物投票で1位となった頭山満ほか、杉山茂丸、山座円次郎などの玄洋社の話、戦前の教科書に載ったという添田寿一のエピソードなどを紹介していただきました。

第15回　森實久美子　天神さまの美術
菅原道真が「天神さま」として信仰の対象となった理由、またそれゆえ道真公の肖像画や像が日本各地に多数存在することを教えていただきました。神社や博物館に保管されている天神像や天神絵巻の映像をたくさん見られたゴージャスな時間でした。

第16回　中山喜一朗　仙厓　―無法の禅画―
福岡市美術館での仙厓展会期中に、お話を聞くことができ、幸運でした。自らを「仙厓さんのお友だち」と称する先生が、とても楽し気に作品の解説をしてくださり、身近に感じることができました。

第17回　田坂　大藏　福岡藩の支配制度
黒田藩が、いかに戦国時代を生き抜き、徳川政権下で功績を残すまでになったのか、家系図と年表を見ながら聞かせていただきました。時代とともに石高の小さい武家が増えていく推移表の解説も興味深かったです。

第18回　白井　克也
考古学から見た朝鮮半島と九州の関係
弥生時代から古墳時代にかけて、朝鮮半島と九州との関連を物語る遺跡を、地図で示してくださいました。それらから出土した棺や土器の特徴から、この時期、九州は人・物の交流・交易で重要な位置を占めていたことを学びました。

第19回　塩津　圭介　能楽と大名
能をどのように見ればよいのかを教えていただきました。舞を見る側が想像するのが能。能楽師は、感情は演じず、肉体のみで、決められた通りに演じるのだそうです。大名や戦国武将のように能を楽しめる「精神的貴族」になりましょう。

第20回　錦織　亮介　曼荼羅
曼荼羅は、本来は密教の儀式する際につくられた「壇」が始まりであるという導入から、密教の普及に力を注いだ空海、最澄の話、そして密教美術の表現の特色まで解説がありました。スライドに映し出された曼荼羅絵に理想の世界を見ることができました。

第16回　10月21日中山先生講義風景

11月18日閉講式

報告 第7回文化人・経済人交流 望年会

12月12日　「ごちそうダイニングななつの花」にて開催

冬のゆうべ、「文化人・経済人交流 望年会」が開催されました。会員の皆様の交流の場として、また会を応援してくださる方々との交流の場としても定着しつつある会です。一般的な交流会よりも、より多方面におよぶバックグラウンドをお持ちの70余人が、同じ空間を共有しました。

今回の目玉は、民謡藤堂流大師範有田いま里さんの民謡。大師範という肩書とは少し違って、とてもキュートな印象なのに、ひとたび歌い始めたら……大変な声量に圧倒されました。オリジナルの「港の渡り鳥」「ふるさとの風」や、民謡メドレー、ナツメロメドレーなど、数多くの曲目で楽しませてくださいました。

終わりに近づいた頃、この会ではもはや恒例と言ってよい、黒田奨学会田中事務局長による博多にわか。ご出席の方々のご専門を意識したユーモラスなものでした。

最後は錦山亭金太夫さんの博多一本締め。その場が一つにまとまって、和やかな雰囲気のままお開きとなりました。

新規会員名簿（敬称略）

（令和元年12月31日現在）

正会員（団体）
株式会社サクラグループHOLDINGS

正会員（個人）
佐藤　民雄　　稲富　修二　　浅野　秀樹

一般会員（個人）
川上　洋子

新規会員を募集しています。ご入会お待ち申し上げます。

編集後記

明けましておめでとうございます。

今回の表紙は福岡城本丸周辺で祀ったとされる警固神社。築城のおり黒田長政によって現在の天神の地に社殿が造営されたゆかりの神社に奉納された絵馬が新年を迎えます。

福岡城市民の会も色々な事に挑戦の年でありたいと願っています。今年もご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

編集・発行　NPO法人：福岡城市民の会

〒810-0042　福岡市中央区赤坂1-12-15
読売福岡ビル7階
TEL　092-716-8238
FAX　092-716-8254
HPアドレス　http://fukuokajokorokan.info
E-mail　staff@fukuokajokorokan.info

［デザイン・印刷］　城島印刷株式会社

福岡城市民の会　検索

市民の会会員の皆様にお知らせ

福岡城さくらまつりの期間中、三の丸スクエア内如水庵でお茶セットが楽しめます。

福岡城市民の会会員証（2019年度会費領収後、お手元に郵送しています）を、如水庵入店時に提示してください。

会員番号が不明の方は、お出かけになる前に、福岡城市民の会に電話等でお尋ねください。（お店に尋ねるのはご遠慮ください）

福岡城さくらまつりの開催期間については、桜の開花状況により決定されますので、同まつりのHPでご確認ください。

お知らせ

第2回 福岡城・城下町フォトコンテスト

福岡城市民の会などを構成団体とした「福岡城・城下町フォトコンテスト実行委員会」は株式会社大央様の協賛により、第2回のフォトコンテストを実施します。

受付は4月20日（月）まで。多数の皆様のご応募をお待ちしています。

また2月8日（土）には城下町の撮影会を開きます（定員あり。要申込み）。

詳細はHPでご覧になれます。

www.fct-photocon.com/